

デフリンピックの歴史、現状、課題及び パラリンピックとの比較

小倉和夫

1. デフリンピックの歴史

デフリンピックの原点は、1924年、折からパリで開催されていたオリンピックをめぐ
る社会的関心の高まりを活用して、ろう者のためのスポーツ大会を開催しようと、同じ
パリで開かれた The International Silent Games（国際サイレント大会）にあるとされ
ている¹⁾。

この大会は、自らもろう者であり、「ろうあのクーベルタン」とも呼ばれるフランス
人 Eugène Rubens-Alcais（ユジェーヌ・リュバン＝アルケ）の主導のもとに行われた。
アルケは1884年生まれで、熱病のため幼児期に聴覚障がい者となった。優秀な成績でフ
ランスの特別支援学校（視覚、聴覚障がい者専門学校）を卒業後、自動車修理工として
働きながら、20歳の時『Le Sportsman Silencieux（無声スポーツマン）』という名前の
雑誌を創刊、続いて1918年、la Fédération Sportive des Sourds de France（略称
FSSF、フランスろう者スポーツ連合）を創設した²⁾。この背景には、もともと、健聴
者とろう者が一緒になり、レスリング、ボクシング、体操競技などが行われていたこと
と、1890年代以降、フランスを中心とする自転車競技においてろう者の参加が始まった
ことなどが影響していたと考えられる。

FSSFの目的は、(イ)フランスにおけるろう者のスポーツ活動の振興と統制、(ロ)
戸外での体育活動の強化、(ハ)中央では実現できていない、スポーツ団体の統合促進
のための基礎作り、(ニ)全てのろう者のスポーツ団体間の関係強化にあったと言われ
る³⁾。

以上の歴史に見るように、デフリンピックの場合、競技大会を開催する以前からろう
者のスポーツ団体が活動しており、そうした活動に一層の弾みをつけるために国際大会
が開催されたのであって、パラリンピックのように競技大会の開催がまずあり、障がい
者スポーツ組織の整備は、大会開催と運営を円滑にするためにむしろ大会の後に促進さ
れたものとは、歴史的事情を若干異にしていることに注目する必要がある。

1924年の大会を契機として、Le Comité International des Sports Silencieux（略称 CISS、国際サイレント・スポーツ委員会）が創設されたが、この創設には、アルケの他、ろう者としてはベルギーで最初の大学学位取得者であり、また、1924年の大会で、銅メダル（テニス）を得た Antoine Dresse（アントワヌ・ドレス）の協力が大きかったとされている⁴⁾。

なお、アルケは、単にろう者のスポーツ活動の促進に貢献したのみならず、自分が卒業した特別支援学校の卒業生の団体などを通じて、フランスにおける手話の普及に大きく貢献したと言われている⁵⁾。

The International Silent Games は、1969年のベルグラード大会を機に、The World Games for the Deaf（世界ろう者競技大会）と名前を変え、さらに、2001年のローマ大会以降は、The Deaflympics（デフリンピック）と呼ばれるようになった。

また、冬季大会は、1949年、オーストリアのゼーフェルドで The International Winter Games for the Deaf（国際ろう者冬季競技大会）として開催されたのが最初であり、1971年のスイス、アーデルボーデン大会以降、The World Winter Games for the Deaf（世界ろう者冬季競技大会）との呼称が定着し、さらに2003年のスウェーデンのストックホルム大会以降、冬季デフリンピック競技大会と呼ばれるようになった。

2. デフリンピックへの参加資格と関係組織の特徴

デフリンピックへの参加資格については、良耳の聴力が、55dB 以上（通常の会話が困難とされているレベル）の聴力損失の者のみ資格があるとされている。そのレベル以外のクラス分けをするといったことは行われていない（こうしたやり方が真にフェアであるか否かについては、未だに論争がある⁶⁾）。

CISS（国際ろう者スポーツ委員会）においては、役員は全てろう者であり、地域代表もろう者である。ただし、役員のうち一名は健聴者であるが、この人物は IOC（国際オリンピック委員会）の会合などで CISS を代表して発言するために任命されている。また、Secretary-General（事務局長）は長年ある種の名誉職的地位であったが、2005 年以来有給の地位となり、名称も Secretary-General から Chief Executive Officer に変更された⁷⁾。

3. パラリンピックとの関係

デフリンピックの組織とパラリンピックの組織が、いわば、公式に関係を持つようになったきっかけは、1980年代に、パラリンピック大会（正確には、パラリンピックの前身であるストックマンデビル大会）の開催を円滑に行うために設けられた International Co-ordinating Committee Sports for the Disabled in the World（略称 ICC、障がい者スポーツのための国際調整委員会、IPC（国際パラリンピック委員会）のいわば前身である機関）において、パラリンピックをさらに発展させるために必要であるとの認識から、IOCに類似した IPC を設立すべく、その準備のための特別委員会が設置され、その委員会への CISS の参加問題が発生したことにあると言って良い⁸⁾。

言い換えれば、1989年のニュージーランド、クライストチャーチ大会において、デフリンピックの会場に初めてオリンピック旗が掲げられたこと⁹⁾に象徴されるように、1980年代において、パラリンピックとオリンピックの関係についての議論が高まり、その過程で、いわばもう一つの障がい者スポーツ国際総合競技大会であるデフリンピックとの関係をどうするかが問題となったのである。

具体的には、デフリンピック関係者 CISS の委員長 Jerald M. Jordan（ジェラルド・M・ジョーダン）が、ICCに参加する形で、デフリンピックとパラリンピックの関係調整が行われることとなった。

しかしながら、CISS の ICC 正式参加には、いくつかの問題あるいは障がいがあった。一つには、CISS の独自の歴史的ステータスである。ICC としては、IOC とできる限り対等に渡り合うためにも、ICC がろう者も含めた障がい者スポーツ競技全体の調整役である形を取りたかったのに対して、CISS 側は、自己の存在意義をできるだけ高めるためにも、独自に IOC と協議することに固執したのであった¹⁰⁾。また、財政上の問題もあった。例えば、ICC 関連会議における手話通訳にかかる費用を、CISS 側ではなく ICC 側が負担すべきとする CISS 側の考え方に、ICC 側としては賛同できなかった。

この手話通訳の費用負担の問題は、単なる通訳費用の分担という財政的問題に止まっているのではないことに注意を要する。すなわち、聴覚障がい者側から見れば、そもそも手話通訳が必要なのは聴覚障がい者ではなく、健聴者であるという考え方が根底にある¹¹⁾。言い換えれば、手話通訳を提供するのは障がい者のために行う福祉事業ではなく、社会全体が当然用意すべき義務なのだという考え方である。この考え方によれば、通訳費用を負担すべき者は、当然 CISS 側ではなく、ICC あるいは IPC 側となるのである。

その他、デフリンピックの開催年次とパラリンピックの開催年次には、ずれがあり、

これを調整しなければならないという問題もあったと考えられ、また、そもそも聴覚障がい者はオリンピック大会に出場可能であり、現に次表のように、何人かの聴覚障がい者は五輪においてメダリストになっていたという背景も、聴覚障がい者は他の身体障がい者とは別であるとの議論を生む理由の一つとなっていたとみられる。

表1 オリンピック競技大会へ出場した聴覚障がい者アスリート (例示)

氏名	国・地域	競技	オリンピック出場年、成績	デフリンピック出場年
Oskar WETZELL	フィンランド	飛び込み	1908ロンドン, 1912ストックホルム	
Gertrude EDERLE	アメリカ	競泳	1924パリ 4×100m自由形リレー金, 100m自由形銅, 400m自由形銅	
Angel ACUNA LIZANA	メキシコ	バスケットボール	1948ロンドン 4位	
Ignazio FABRA	イタリア	レスリング グレコローマン フライ級	1952ヘルシンキ銀, 1956メルボルン銀, 1960ローマ5位, 1964東京4位	1961, 1965, 1969
Ildiko REJTO-UJLAKI	ハンガリー	フェンシング フルーレ	1960ローマ団体銀, 1964東京個人金, 団体金, 1968メキシコ個人銅, 団体銀, 1972ミュンヘン団体銀, 1976モントリオール団体銅	
Susan PEDERSEN	アメリカ	競泳	1968メキシコ 4×100m自由形リレー金, 4×100mメドレーリレー金, 100m自由形銀, 200m個人メドレー銀	
Gerhard SPERLING	東ドイツ	20km 競歩	1964東京, 1968メキシコ5位, 1972ミュンヘン4位	1961, 1969, 1977
Vyacheslav SKOMOROKHOV	ソ連	400m ハードル	1968メキシコ5位	1965, 1969, 1973, 1977
George MASIN	アメリカ	フェンシング	1972ミュンヘン, 1976モントリオール	
Jeffrey FLOAT	アメリカ	競泳	1984ロサンゼルス 4×200mリレー金, 200m自由形4位	1977

デフリンピックの歴史、現状、課題及びパラリンピックとの比較

氏名	国・地域	競技	オリンピック出場年、成績	デフリンピック出場年
Piero ITALIANI	イタリア	飛び板飛び込み	1984ロサンゼルス 6位 1988ソウル	1993
David WHARTON	アメリカ	競泳	1988ソウル400m個人メドレー 銀, 1992バルセロナ400m個人メドレー 4位	
Dean Bryan SMITH	オーストラリア	10種競技	1992バルセロナ	1985, 1989, 1993, 2005
Jueri JAANSON	エストニア	ボート シングル, ダブルスカル	1988ソウル, 1992バルセロナ 5位, 1996アトランタ, 2000シドニー 6位, 2004年アテネ 銀, 2008北京 銀	
Terence PARKIN	南アフリカ	競泳	2000シドニー200m平泳ぎ 銀, 400m個人メドレー 5位	1997, 2001, 2005, 2009, 2013
Frank BARTOLILLO	オーストラリア	フェンシング	2004アテネ	
Hugo PASSOS	ポルトガル	レスリング グレコローマン	2004アテネ	1997, 2001, 2005, 2009, 2013, 2017
Tamika CATCHINGS	アメリカ	女子バスケットボール	2004アテネ 金, 2008北京 金, 2012ロンドン 金, 2016リオ 金	
Norbert KALUCZA	ハンガリー	ボクシング フライ級	2008北京	
Maria Belen DUTTO	アルゼンチン	BMX (バイク シクル・モトクロス) サイクリング	2008北京	
Chris COLWILL	アメリカ	飛び板飛び込み	2008北京 4位, 2012ロンドン	
Fausto QUINDE	エクアドル	50km 競歩	2008北京	
David Michael SMITH	アメリカ	男子バレーボール	2012ロンドン	

出典：筑波技術大学「デフリンピック啓発パネル」を参考に、パラリンピック研究会小林高平研究員作成。
http://deafstudies.jp/info/files/deaflympics_deaf_athletes.pdf (2017年9月25日)
 ICSD <http://www.deaflympics.com/athletes.asp> (2018年1月15日)

こうした事情あるいは背景によって、結局、CISS関係者とICC及びIPC関係者との間の意見の隔たりは埋まることなく、1990年に両者の間で、デフリンピックはパラリンピックとは独自に大会を行うこと、各国の聴覚障がい者スポーツ団体の自主性を尊重することなどを織り込んだ協定が取り交わされたのであった¹²⁾。このように、両者が合意に至らなかった背後には、いくつかの事情ないし要因が絡んでいたとみられる。ICCの中で、新しいメンバーたるCISS関係者や知的障がい者競技連盟関係者は、パラリンピック関係事項について投票権を持つべきではないと言う議論が強かったことも例に挙げられる¹³⁾。また、ICCの委員長にはCISS関係者は任命されないという問題もあった¹⁴⁾。つまるところ、CISS側から見ると、ICCのメンバーになれば、会議出席のための旅費や手話通訳の費用など、財政的負担が増える一方、メンバーになったことから生ずるメリットは取り立ててないという結論になったとみられる。その後、デフリンピックとパラリンピックとの協力関係は冷却化し、1989年にIPCが正式に発足した6年後、1995年に、CISSは正式にIPCのメンバーシップから離脱したのであった。

4. デフリンピックを巡る「概念的」問題点

デフリンピックを巡る問題ないし課題のうち、理論的あるいは概念上の問題としては、まず、聴覚障がいの程度の判定と競技スポーツへの参加資格ないし基準との関係の問題がある。

第一に、高度な競技大会、とりわけ国際総合スポーツ大会であるデフリンピックについては、競技条件をできるだけフェアにする意味から、55dB以上と言う条件をより厳しくして、例えば70dB以上の者とするという考え方もあると言われる。他方、そうすれば競技大会への出場の可能性のあるろう者の数は減るであろうし、多くのろう者をデフリンピックに出場させたいと言う理念に反するという見方もあり、課題として残されている¹⁵⁾。

この点とも関連して、若干の国では、地方レベルの大会へは出場条件を緩和し、障がいの程度の軽い者も参加できるようにとりはかるが、全国的な競技大会では、障がいの程度の重い者が中心となるようにとりはかる慣例の是非も問題となっている。この背景には、競技団体のできるだけメンバー数を増やしたいという意図、あるいは、聴覚障がいの程度の厳密な認定には、コストがかかるという理由などが絡んでいると見られている¹⁶⁾。

次に、補聴器の装着の問題がある。デフリンピックでは、補聴器の装着が禁止されているが、これは補聴器が運動中壊れる恐れがあるといった理由よりも、補聴器の装着に

よって「有利な」条件を得るのは、競争上フェアではないという理念に基づくものとされている。

しかしながら、その根底には、さらに深い考え方が潜んでいる。すなわち、補聴器は、聴覚障がい者を、できるだけ健常者に近づけるための用具であり、また、補聴器によっても十分聴覚機能を改善できない障がい者も存在する以上、補聴器はいわばろう者が「聴者の世界に順応していることを示す象徴的意味合いを持っている」¹⁷⁾こととなり、それは結局ろう者の真のアイデンティティを傷つけるものだという概念である。つまり、補聴器が（それを使用する）各人に与える効果はそれぞれ異なり、また予想できないものである以上、競技の上で、その使用を除外することは、それ（除外）がろう者であること（deafness）とフェアネスを象徴する行為の一つだからである」とされている¹⁸⁾。

ちなみに、ろうのスポーツ競技者へのアンケート結果によれば、練習時において補聴器を装着している者は25.8%であり、またデフリンピックにおいて補聴器を使用したいという者は全体の24.5%にのぼっている。一方で、補聴器を使用したくないという者（51.7%）にその理由を尋ねると、競争条件の公平性の確保と損傷の危険の回避が、ほぼ同じ程度あげられている¹⁹⁾。

最後に、デフリンピックが、もっぱら手話をコミュニケーションの手段としていることから、手話の社会的普及にも役立っているという側面がある²⁰⁾。手話の使用については、歴史的に見れば、それが禁止されたり、あるいは奨励されなかったりした時代及び国々があったことを考慮すれば、デフリンピックにおける手話の活用の意義も無視できない。

さらに言えば、手話を越えて、そもそも仕草やサイン、あるいはジェスチャーが、言語と並んで人間同士のコミュニケーションに果たす役割を人々が認識する効果があるとも言え、そのことは同時に、音が人間のコミュニケーションに果たす役割についての再評価にもつながるとも言えよう。言い換えれば、音声も、実のところ、物理的だけではなく、社会的にその「意味」が決められていることも少なくないということである。例えば、咳（いわゆる空咳）も、コンテキストによっては、体の状態の表現ではなく、不信感や警戒感の伝達に使われることを考えれば、音には、それぞれ「社会的意味」が込められているということもできよう²¹⁾。

5. デフリンピック特有のコミュニケーション問題

上記の如く、デフリンピックが、結局パラリンピックと統合あるいは結合する道を選ばず、あくまで独自の理念を貫いた裏には、競技をする上でのルールの違い²²⁾の他にも、デフリンピックが長い歴史を誇り、独自の発展を遂げてきたという歴史的事情が、その背景に潜んでいたことは間違いない。けれども、そうした歴史的事情もさることながら、ろう者の競技大会におけるコミュニケーションの問題は、デフリンピック特有の問題であり、そうした問題をパラリンピックに持ち込まれることは、パラリンピック側として容易に受容できることではなかったという点も作用していたと考えられる。

そうした、デフリンピック特有のコミュニケーションの問題は、手話の使用にまつわることがほとんどである。それは単に、手話通訳の必要性といった問題に止まらない。より細かな配慮が必要になる場合もある。例えば、健常者の事務局員が、ろうの選手に連絡を取ろうとして電話した場合、電話の内容を「通訳」するためには、両手が空いていなければならない、電話機を手に持ちながらの通訳は困難であり、従って手話通訳者の保持する携帯電話は、ハンズフリーのものでなければならない、といった問題がある。

また、選手や関係者が競技場の外に出る場合は、地元の町の健常者との簡単な対話は身振り手振りになることも多いが、その場合、国によっては身振り手振りの意味が、一般的なものと違うこと（例えばブルガリアでは、首を横に振る身振りは、肯定を意味する）について、あらかじめ選手や関係者に「学習」しておいてもらう必要があるということも無視できない（現に、ブルガリアのソフィアで開催された第22回大会の際、ブルガリアの習慣に戸惑った日本関係者がいたと言われている²³⁾）。

さらに、日本の場合、監督やコーチがほとんど全員健常者であり、他方、選手はろう者であるため、相互のコミュニケーションを円滑にするためには、手話通訳が必要になることがしばしばであるが、各競技特有の用語などを通訳がマスターするには、事前の練習が必要であること、また、言語上の通訳が選手の生活面に及ぶ場合も多く、その際には、通訳業務を越えた「お世話」を事実上行わざるを得ないケースがままあり、通訳の行うべき業務の明確な定義の必要があることなどが問題視されている²⁴⁾。さらに、音声による審判の判断をどこで、どのように手話で選手に知らせるかといった問題²⁵⁾や、開会式の司会を健常者が行うことの是非²⁶⁾といった問題も存在すると言える。

こうしたデフリンピック特有の「コミュニケーションにまつわる問題」は、ある意味では、デフリンピックの独自性とろう者のコミュニケーション問題の深刻さを物語るものであるが、他方、デフリンピック関係者の間には、健常者の場合、英語力の不足など、

言語上の問題から国際交流に支障をきたす例も少なくないが、聴覚障がい者の場合、たとえ各国の手話は異なっても、2日から3日あれば相当の意思疎通がはかれるものであるという見方もあり²⁷⁾、ここにも、デフリンピックの独自性が滲み出ている。

6. デフリンピックとパラリンピックをめぐる 実務上の課題の類似性と相違点

デフリンピックに参加した選手、コーチ、スタッフなどの報告を分析すると、そこに(少なくとも日本にとって)デフリンピック参加に伴う課題、問題点が浮かんでくる。それらの問題は、パラリンピックとかなり共通点が多いが、その態様や問題の大きさ、深さなどの点で相違もみられる。そうした問題ないし課題について、最近の4大会(夏季については、第21回、第22回大会、冬季については第16回、第18回—第17回は中止された—)の選手団報告書を中心に取りまとめてみると大略次の通りである。

(1) 認知度²⁸⁾

デフリンピックの認知について特徴的なことの一つは、出場した選手あるいは参加したスタッフ自身、直前あるいは数年前まで、デフリンピックの存在すら知らなかったというケースが散見されることである。

例えば、第21回大会のバスケットボール男子に出場した西正剛選手の場合は前年まで、バドミントンの井上美緒選手の場合は大会4年前まで、また、第16回冬季大会にスキーのワクシングなどについて指導、協力のため参加したスタッフの場合は、大会直前までデフリンピックの存在を知らなかったという²⁹⁾。

デフリンピックの認知度向上の必要性については、資金的な問題解決のためという観点からの指摘が多いが³⁰⁾、むしろ、選手をはじめ、参加者の基本的な意欲と関連するとの指摘、すなわち、メダルを取ってもそれがあまり社会的に認知、評価されないことに問題があり、メダル獲得の報奨金や待遇以前の問題であるという指摘³¹⁾にも注意を要しよう。

また、認知度を向上させるためには、デフリンピック関連記事にストーリー性をもっと持たせるべきであるとして、監督、選手、スタッフが一体となって、次のような点を中心にデフリンピック競技についての広報を強化することが必要だとの指摘もある³²⁾。

1. 視点 (この試合をどう評価しようか。どういう形で取り上げるか。)
2. 勝負のポイント (勝者、敗者の背景)
3. エピソード (どれだけ努力してきたのか。)
4. 技術解説 (スポーツ面である以上、何故勝てたのか。)

5. プロフィール（経歴、どういう所でプレーしてきたのか。）
6. 記録（当然ながらスポーツは記録で成り立っているのでデータ反映も非常に大事）

なお、2005年時点の認識ではあるが、2004年12月に秋篠宮同妃両殿下がデフリンピック関係者と接見されたことが、デフリンピックの社会的認知度を高めるのに大きく貢献したとして、皇室の関与の役割を指摘する声もある³³⁾。

デフリンピックの認知度を考察する上で、デフリンピックについての報道の頻度、態様を分析することも有意義と考えられる。

2017年7月18日から30日にかけてトルコのサムスンで開催された第23回夏季デフリンピック競技大会に関する全国紙（朝日、毎日、読売）の報道件数を、前回のデフリンピック（第22回夏季デフリンピック競技大会、2013年ブルガリア、ソフィア開催）の報道件数、及びサムスン大会とほぼ同時期（2017年7月14日から23日）にロンドンで開催された世界パラ陸上選手権大会に関する報道記事を比較したものが表2である。

なお、今回の新聞報道調査の対象期間は各大会期間の前後3日を含み、全国版の朝・夕刊で、それぞれ検索キーワード「デフリンピック」または、「世界パラ陸上」に該当する記事を収集した。

表2 各新聞社におけるデフリンピック及びパラ陸上の記事数

	デフリンピック2013	デフリンピック2017	パラ陸上選手権2017
朝日	1	25	10
毎日	0	12	24
読売	0	24	7

出典：パラリンピック研究会小林研究員作成。

表2から分かるように、前回の大会に比べ、飛躍的に報道数が増えている他、ほぼ世界パラ陸上選手権並み、あるいは、それ以上の報道件数がみられることがわかる。

また、報道の内容、とりわけ、報道が運動面、社会面などの紙面に掲載されているかを見ると、次の表3、4の通りである³⁴⁾。新聞により顕著な違いが見られる他、パラ陸上の報道が各紙とも運動面に集中しているのに対し、デフリンピックについては、社会面はじめ、運動面以外での掲載も相当数に上っていることが特徴的である³⁵⁾。

表3 2017年トルコ・サムスン大会における新聞報道（紙面別）

	運 動	総 合		解 説	社 会	その他	総記事数
		1 面	その他				
朝日	0	1	2	0	21	1	25
毎日	9	0	1	1	1	0	12
読売	16	0	6	2	0	0	24

出典：パラリンピック研究会小林研究員作成。

表4 2017年ロンドンパラ陸上大会における新聞報道（紙面別）

	運 動	総 合		解 説	社 会	その他	総記事数
		1 面	その他				
朝日	10	0	0	0	0	0	10
毎日	24	0	0	0	0	0	24
読売	4	0	3	0	0	0	7

出典：パラリンピック研究会小林研究員作成。

(2) 健聴者との関係

パラリンピックの場合と同じく、デフリンピック関係者の間でも、ろうの選手あるいは選手候補と、健聴者との合同での活動の強化を呼びかける声もある。例えば、ボーリング競技では、健聴者のコーチの活用と並んで、健聴者との「関わりの増大」が提起されている³⁶⁾。また、アルペンスキーやスノーボード等でも、健聴者のトレーニング、試合などにろう者も積極的に参加すべきとの意見、あるいは健聴者との合同合宿を呼びかける声もある³⁷⁾。

その一方、現状でも、選手同士あるいは健聴者の監督やコーチと選手との間のコミュニケーションの難しさを指摘する声もある³⁸⁾ことに注意を要しよう。

また、デフリンピック大会では、審判員や競技関係役員には健聴者が多く、そうした人々とのコミュニケーションには、日本の場合特有の問題（手話通訳だけでなく、英語や現地語など、語学の通訳の帯同が必要となることなど）があるとの指摘もある³⁹⁾。

(3) デフリンピックと社会

パラリンピックと同じく、デフリンピックは、認知度を高めることなどを通じて、その社会的意味を強め、ろう者に対する社会的関心と配慮を深める契機となり得ると考えられる。そうした社会的意味については、パラリンピックとの比較において、いくつか注目すべき点がある。一つは、健聴者の方で、自らの感情や感動の表し方について考え

させられる機会になり得るという点である。第16回冬季大会にスタッフとして参加した瀬川奈美の次の言葉は、このことを暗示している⁴⁰⁾。「ろう者は拍手の代わりに頭の上でキラキラ星の歌を歌う時のように両手をクルクルさせるが、選手がゴールするたびに大勢の応援者から一斉にクルクルの拍手がたくさん舞う。メダル決定の瞬間、監督・スタッフと選手がコミュニケーションの壁を超えて、喜びを分かち合うシーンは心に響いた。表彰式では金メダリストの原田選手・笠井選手の時に日本の国歌・君が代が流れ、日本の手話通訳者が手話コーラスをすると、他の国のろう者も見よう見まねで一緒に歌ってくれた。また、地面を足でドンドン鳴らして、地響きで表彰台のメダリストに拍手を伝えるのもデフリンピックの特徴である。」

また、いわゆるバリアフリーの問題についても、デフリンピックは、パラリンピックとはまた違った視点の必要性を認識せしめる機会となり得ると言える。例えば、物理的バリアフリーの中には、ろう者が、エレベーターに閉じ込められた場合の対策（通常のインターフォンによる連絡が困難なことも想定されること等）の問題等はその一例と言えよう。また、デフリンピック大会ですら、スタート順位や結果の発表が主として音声で行われ、視覚による表示が十分でなかった例⁴¹⁾、あるいは、開会式閉会式の司会が音声中心であった場合⁴²⁾、あるいはまた、競技会場に大型モニター等視覚での情報補助装置が不足していたケース⁴³⁾等が指摘されており、こうした点は、きめの細かいバリアフリー対策を打ち立てようとする時には、考慮すべき視点と言える。

さらに、そもそも、社会的に見れば、手話通訳者が絶対的に不足していること、あるいは大半の手話通訳者が、部分的な活動をしている場合が多く、職業的通訳者の養成が遅れていること⁴⁴⁾もバリアの一つと言えよう。

また、手話を用いる人々のために、片手での操作が容易な携帯電話の開発、普及等も、バリアフリーへの努力の一部と言って良いであろう。さらに、イヤフォン付き携帯の使用によって、音声による電話連絡をろう者に伝達する際に、手話通訳者が、無理な姿勢をとることなく通訳できる体制を整えること⁴⁵⁾等も検討し得よう。

加えて、スポーツにおける音声の意味についての、一層進んだ研究の必要性もあると思われる。例えば、クロスカントリースキーの監督を務めた荒井秀樹は、クロスカントリースキー競技における「音」からのイメージ作りの重要性を次のように指摘しているが⁴⁶⁾、これは、聴覚障がいのある選手たちに、どのようなやり方で、通常は音声を通じて理解するものを、把握せしめるかについての研究がさらに必要なことを暗示していると言えよう。「クロスカントリースキーなどテクニックが重要とされているスポーツにおいて、とても大切だと言われているのは『イメージ』である。それは、脳から筋肉へ伝えるものは、イメージで、これがないと筋肉に伝えられない。そのイメージをより鮮明にする

ためには、目からの情報とあわせて、耳からの情報がとても大切だと言うことである。うまい選手ほどスキー板の音を立てないで滑走していく。だから、こども達には、分かりやすく、『パタン、パタンと音を立てないで、スー、スーとスキーを滑らしてごらん』と教えたりする。私達スタッフは、デフ選手と練習を重ねていく中で、イメージ作りは、目だけでなく、ひょっとすると耳から入る情報がとても重要ではないかということに気がついた。」

(4) スポーツ競技大会としてデフリンピックがパラリンピックとほぼ共通して直面している課題

選手強化、育成や役員の能力、資質、あるいは競技団体の体質、さらには日本にやや特有の国際的視野の問題等、各種の次元で、日本のデフリンピックは、パラリンピックと共通の実務的課題に直面しているとみられるが、これらの点を近年の選手団報告書を基に列挙してみると、(イ) 選手の個人負担が多すぎることで、競技団体や関連機関の支援が不十分であること⁴⁷⁾、(ロ) 選手及びスタッフの自己管理（体調管理やケガの予防など）の強化の必要があること⁴⁸⁾、(ハ)（特に他国選手と比べ）精神面を強化すべきこと⁴⁹⁾、(ニ)（競技技術そのものもさることながら）基礎体力の向上の必要があること⁵⁰⁾、(ホ) 企業支援の拡大を含めた「プロ」意識醸成が重要であること⁵¹⁾等を挙げることができる。また第20回大会の報告書などでは、他国の選手、競技能力についての情報不足を指摘する声もあったが⁵²⁾、この点は、現在パラリンピック関係者からも（競技によっては）指摘されているところである。

7. デフリンピックの理念と独自性

デフリンピックは、歴史的にも、また、現在における方針としても、ろう者のアイデンティティを深め、ろう者同士の国際交流を深めることを理念としていると考えられる。その場合、現在ろう者自身でほぼ行われている組織の運営や練習、合宿などについて、健聴者の参加あるいは共同作業をどこまで進めるかは、デフリンピックのアイデンティティとの関連のみならず、現実的、実際の観点からも慎重に検討する必要がある（例えば、合宿や試合にあたって、健聴者とろう者を同じ部屋に泊めることの是非といった問題についても指摘されている）⁵³⁾。

デフリンピックそのもののアイデンティティの問題とも関連して、ろう者個人のアイデンティティの問題がある。この点については、デフリンピックが、国際交流を通じて選手や参加者のろう者としてのアイデンティティを強めることに役立ったという指摘も

ある⁵⁴⁾。

このような個人のアイデンティティの問題と関連して、デフリンピックへの参加者名簿において、現在出身地しか掲載されていないことと関連して、その他の個人情報（所属会社や学校名等）を、支援者への考慮もあって公表すべきという考え方⁵⁵⁾もあることを、どう考慮すべきかの問題もある。ここには、ろう者であることを、どこまで、いつ、どこで、公表することが妥当であるかの問題が潜んでおり、それは、ろう者のアイデンティティの問題とつながっていると言えよう。

また、デフリンピックが、特定国のろう者コミュニティの結束やアイデンティティの強化に役立ったと見られる事例については、ロシアで開催された第18回大会が、ロシアのろう者コミュニティの再生に役立ったという指摘もあることが注目される⁵⁶⁾。

なお、各国のろう者の社会的アイデンティティと国際交流との関係については、各国特有の手話をどこまで国際大会においてその使用を許容、尊重すべきかの問題もあると考えられる。

他方、デフリンピックが、ろう者のみならず、ろう者と健常者との間の、ある種の一体感を醸成する効果があることに注目する必要があるだろう。ローマ大会の開会式で、多くの観衆は式典を見ずにお互い談笑しあっていたという記述は、この点を裏書きしている⁵⁷⁾。こうした観点から見れば、デフリンピックのイメージをオリンピックのイメージにできるだけ近づけることは、ろう者との社会的共生促進のシンボルともなり得ると言えよう⁵⁸⁾。

注

- 1) ドナルダ・アモンズ, 2008, 「ろう者スポーツとデフリンピック」, <http://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/presrep-j.pdf> (2017年10月22日).
- 2) Cabanel, P. and Encrevé, A., 2015, "Dictionnaire biographique des protestants français de 1787 à nos jours," Les Editions de PARIS, Tome 1, 34.
- 3) 同上, 34.
- 4) Le Comité International des Sports Silencieux (略称は CISS であり, 英語名は, The International Committee of Silent Sports: ICSS) 「国際サイレント・スポーツ委員会」は, のちに Le Comité International des Sports des Sourds (略称は CISS であり, 英語名は, The International Committee of Sports for the Deaf: ICSD) 「国際ろう者スポーツ委員会」と名称を改めた。ICSD 憲章によれば, 同委員会はフランス語名の頭文字である CISS と, 英語名の頭文字の ICSD の両方を使用している。International Committee of Sports for the Deaf, Deaflympics Constitution, <https://www.deaflympics.com/icsd.asp?constitution> (2017年10月21日)。本稿では特に断りのない限り「国際ろう者スポーツ委員会」のことを「CISS」と表記する。
- 5) Cabanel and Encrevé, 前掲書, 35.
- 6) Gertz, G. and Boudreault, P., 2016, "The SAGE Deaf Studies Encyclopedia," SAGE Publications, Inc, 3, 926.
- 7) 同上, 927.

- 8) 及川力, 1998, 「国際ろう者スポーツ委員会が国際パラリンピック委員会を離脱した要因について」, 『スポーツ教育学研究』, 18, 50.
- 9) Bailey, S., 2008, "Athlete First," John Wiley & Sons, 94-95.
- 10) 同上, 71.
- 11) 及川, 前掲書, 52.
- 12) 同上, 51.
- 13) Bailey, 前掲書, 75-76.
- 14) 同上, 82.
- 15) Stewart, D. A., 1991, "Deaf Sport," Gallaudet University, 23.
- 16) 同上, 22.
- 17) 砂田武志, 1996, 「ろう者とスポーツ」, 『現代思想臨時増刊号』, 24(5), 青土社, 153.
- 18) Stewart, 前掲書, 25.
- 19) 中村有紀, 2009, 「デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書」
<https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/tsukuba-report.pdf> (2017年10月26日)
- 20) 「International Sign (国際手話)」にも議論があり, 英語の表記は「sign (サイン)」と「sign language (サイン・ランゲージ)」とで, 「言語」であるか否かという点で明確に区分されている。International Sign は主として欧州で使われている共通の手話であって, 全日本ろうあ連盟が「国際手話」と訳したのだが, The World Federation of the Deaf (略称WFD, 世界ろう連盟) は International Sign が International Sign Language と呼ぶに値するかについて何度か会議を持って議論しているが, Language と呼ぶに至っていないと判断されている。つまり, デフリンピックで使われている「International Sign」とは, 唯一の公用語であるものの, それは各国の文化や言語を超えた「sign (サイン)」であり, 正式には言語ではないとする議論もある。本稿では「手話と言語」について詳しく言及することは避けるが, デフリンピックで使われるような International Sign は, 少なくとも「コミュニケーションのひとつの方法」として捉えることができるだろう。
- 21) Padden, C. and Humphries, T., 1988, "Deaf in America," Harvard University Press, 92-93, 99.
- 22) デフリンピックでは, 競技のスタート音や審判の声による合図を, 照明による発光によって選手に合図を送るなど視覚的に工夫している点以外, オリンピックと同じルールで運営されている。
- 23) 一般財団法人全日本ろうあ連盟, 2014, 「第22回夏季デフリンピック競技大会日本選手団参加報告書」, <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/report2013.pdf> (2017年10月22日), 25, 106。以下「第22回大会報告書」とする。
- 24) 財団法人日本障害者スポーツ協会, 財団法人全日本ろうあ連盟, 2010, 「第21回夏季デフリンピック日本選手団参加報告書」, <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/report2009.pdf> (2017年10月22日), 83。以下「第21回大会報告書」とする。
- 25) 第22回大会報告書, 127.
- 26) 同上, 32.
- 27) 第21回大会報告書, 113.
- 28) 日本及び諸外国における「デフリンピック」という言葉の認知度に関する経年・国際比較の詳細は, 本誌掲載, 小林尚平研究員の調査報告の44ページを参照されたい。
- 29) 第21回大会報告書, 64, 68。財団法人日本障害者スポーツ協会, 財団法人全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会, 2007, 「16th Winter Deaflympics SALT LAKE 2007」, <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/report2007.pdf> (2017年10月23日), 15 (この大会報告書にはページ番号がないため, 便宜上「2. 役員・選手報告」を1ページ目とし, 著者がページ番号を打ったものである)。以下「第16回大会報告書」とする。

- 30) 第22回大会報告書, 82, 128。一般財団法人全日本ろうあ連盟, 2015, 「第18回冬季デフリンピック競技大会日本選手団参加報告書」, <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/report2015.pdf> (2017年10月22日), 28, 以下「第18回大会報告書」とする。
- 31) 第18回大会報告書, 28.
- 32) 同上, 20.
- 33) 財団法人全日本ろうあ連盟, 2005, 「2005メルボルンデフリンピック大会報告書」, <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/report2005.pdf> (2017年10月28日), 58。以下, 「第20回大会報告書」とする。引用部分においては, 「2004年11月」となっているが, 正しくは「12月」である。
- 34) 各紙の報道件数についての表も含め, 第23回夏季デフリンピック競技大会(トルコ, サムスンデフリンピック2017)を視察した日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会小林尚平研究員の調査報告による。
- 35) ここで指摘しておかなければならないのは, デフリンピック2017における記事の掲載面についてである。具体的には, デフリンピックに関する記事がスポーツ面で掲載されず, 社会面での掲載が多くなっているものもあるが, それは一概にデフリンピックが「スポーツ」として捉えられていないというわけではなく, トルコ, サムスンでの現地取材を行い, 記事を書いた「記者の所属部署」に大きく影響されているという点について留意しておく必要がある。
- 36) 第21回大会報告書, 86.
- 37) 第18回大会報告書, 31, 40.
- 38) 第21回大会報告書, 66.
- 39) 同上, 82.
- 40) 第16回大会報告書, 7.
- 41) 同上, 36.
- 42) 同上, 32.
- 43) 第22回大会報告書, 32.
- 44) 同上, 127.
- 45) 第21回大会報告書, 35。第22回大会報告書, 33.
- 46) 第16回大会報告書, 26.
- 47) 第22回大会報告書, 125.
- 48) 第16回大会報告書, 24。第18回大会報告書, 31。第21回大会報告書, 52, 75。第22回大会報告書, 48, 51, 64, 71, 103, 115.
- 49) 第16回大会報告書, 18, 32。第18回大会報告書, 42, 43。第21回大会報告書, 32, 52, 53, 64, 66, 140, 141。第22回大会報告書, 26, 50, 65, 67, 80, 119, 130.
- 50) 第21回大会報告書, 73, 134。第22回大会報告書, 58.
- 51) 第22回大会報告書, 83, 105.
- 52) 第20回大会報告書, 63.
- 53) 第18回大会報告書, 13.
- 54) 第21回大会報告書, 95.
- 55) 第22回大会報告書, 45.
- 56) 第18回大会報告書, 22.
- 57) Breik, J.-K., Hauland, H. and Solvang P., 2002, "Rome - a Temporary Deaf City," Stein Rokken Center for Social Studies, 30.
- 58) 同上, 29にもやや似た観察が記述されている。

The Deaflympics: History, Present Status, Issues, and Comparison with the Paralympics

Kazuo OGOURA

1. History of the Deaflympics

The origin of the Deaflympics is generally considered to be the International Silent Games held in 1924, the same year the Olympics was held in Paris. Utilizing the rising social awareness from the Olympic Games, the International Silent Games was held, also in Paris, as a sports event for the deaf.¹⁾

The Silent Games was held under the leadership of Eugène Rubens-Alcais, a Frenchman who was himself deaf, and who became known as the “deaf version of Baron de Coubertin.” Alcais was born in 1884 and had a hearing impairment as a result of a fever during his childhood. After graduating from a school of special needs education (a specialized school for students with visual and hearing disabilities) with high marks, he worked as an auto mechanic and at the age of 20, created a magazine called “The Silent Sportsman” (le Sportman Silencieux). In 1918, he established the French Deaf Sports Federation (la Fédération Sportive des Sourds de France – abbreviated FSSF).²⁾ Two factors are believed to have influenced these events: both deaf and non-deaf athletes originally competed together in sports such as wrestling, boxing and gymnastics and after the 1890s, deaf athletes began to participate in cycling competitions, which were mainly held in France.

The objectives of FSSF were: A) to develop and regulate the sports activities of deaf athletes in France; B) to promote outdoor physical activities; C) to create a foundation to promote the integration of sports organizations, which had not been accomplished centrally; and D) to strengthen relations between all sports organizations for the deaf.³⁾

As can be seen in this history, there are some differences between the backgrounds of the Deaflympics and the Paralympics. In the case of the Deaflympics, activities were already undertaken by sports organizations for deaf athletes before tournaments

were held. Therefore, it can be said that international tournaments were held with the objective to provide further momentum to those activities. In the case of the Paralympics, the tournaments came first and the foundation of sports organizations for athletes with physical disabilities was promoted later as a means for the smooth running of the tournaments.

Using the momentum of the 1924 Silent Games, the International Committee of Silent Sports (le Comité International des Sports Silencieux – CISS) was established. This was made possible largely with the cooperation of Antoine Dresse, a Belgian who was the first deaf person in Belgium to acquire a university diploma, and who won a bronze medal in tennis in the 1924 Games.⁴⁾

It should also be noted that Alcais not only contributed to sports activities for the deaf, but that he also contributed greatly to the spread of sign language in France through organizations such as the special support education school from which he himself graduated.⁵⁾

The International Silent Games changed its name to the World Games for the Deaf in 1969, the year it was held in Belgrade. From 2001, when it was held in Rome, it has been called the Deaflympics.

Additionally, the Winter Games began in 1949 as the International Winter Games for the Deaf, when it was held in Seefeld, Austria. Since the 1971 Games in Adelboden (Switzerland), the term “World Games for the Deaf” took root, and from the 2003 Games in Sundsvall (Sweden), it began to be called the Winter Deaflympics.

2. Entry Qualifications for the Deaflympics and the Characteristics of Related Organizations

In order to enter the Deaflympics, athletes must be a person with a hearing loss of 55dB or greater in better ear (in other words, a level that makes daily conversations difficult). There are no further classifications (the fairness of this method is still being debated).⁶⁾

The executives in the International Committee of Sports for the Deaf (le Comité International des Sports des Sourds – CISS) are all persons with hearing disabilities,

as are the regional representatives. However, there is one executive member who is not deaf, appointed to represent and deliver statements on behalf of CISS at conferences such as the IOC. In addition, the Secretary-General, an honorary position for many years, became a paid position from 2005 and the title was changed from Secretary-General to Chief Executive Officer.⁷⁾

3. Relationship with the Paralympics

The first time the Deaflympics and Paralympics organizations officially formed a relationship was in the 1980s when the International Co-ordination Committee (the ICC, predecessor of the IPC, mentioned below) was established with the objective of organizing the Paralympics smoothly (at the time called the International Stoke Mandeville Games, the predecessor of the Paralympics). There, it was determined that in order to develop the Paralympics it was necessary to establish the IPC (International Paralympic Committee), similar to the IOC (International Olympic Committee), and a special committee was established for its preparation. Issues arose concerning CISS's participation in that committee.⁸⁾

This was related to the debate regarding the relationship between the Paralympics and the Olympics, which intensified in the 1980s. As part of this debate, how to define the relationship with the Deaflympics - the other international sports tournament for athletes with disabilities - was raised as an issue.

This was symbolized in the raising of the Olympic flag for the first time in the Deaflympics in 1989 at Christchurch, New Zealand.⁹⁾ In the end, a Deaflympics official (Jerald M. Jordan, President of CISS) joined the ICC to coordinate the relationship between the Deaflympics and the Paralympics.

However, there were several issues and obstacles to the CISS's official participation in the ICC. One was the CISS's historical status. In part, in order to be as equal as possible to the IOC, the ICC wanted to take on the role of coordinating all sports for people with disabilities, including the deaf. In contrast, the Deaflympics was insistent on negotiating with the IOC independently in order to maintain and increase the significance of their existence.¹⁰⁾ In addition, there were financial issues. For example, the CISS side thought the ICC should cover the costs of arranging for sign language interpreters during ICC related conferences, but the ICC side did not agree.

It should be noted that this issue of covering sign language interpretation costs was not simply a financial matter of who takes on the burden of the expenses. At the basis of the issue was the view – as seen from the perspective of the deaf – that sign language interpretation was necessary not for the deaf, but for those who can hear.¹¹⁾ In other words, this meant that sign language interpretation should not be provided as a form of welfare for the deaf, but as an obvious obligation to be provided by society. According to this way of thinking, the party responsible for bearing the expenses of the interpretation should naturally be the ICC or the IPC and not the CISS.

Another problem was that the years for holding the Deaflympics and the Paralympics differed and needed to be adjusted. Furthermore, deaf athletes are able to enter the Olympics, and as the following table 1 shows, several deaf athletes have become Olympic medalists in the past. This was one of the reasons that triggered a debate on how people with hearing disabilities differed from those with other physical disabilities.

Table 1: Deaf athletes who participated in the Olympic Games (examples)

Name	Country	Event	Olympics Entry Year, Achievements	Deaflympics Entry Year
Oskar WETZELL	Finland	Diving	1908 London, 1912 Stockholm	
Gertrude EDERLE	USA	Swimming	1924 Paris – 4×100 m Freestyle Relay Gold Medal, 100 m Freestyle Bronze Medal, 400 m Freestyle Bronze Medal	
Angel ACUNA LIZANA	Mexico	Basketball	1948 London – 4 th Place	
Ignazio FABRA	Italy	Wrestling Greco-Roman Flyweight	1952 Helsinki – Silver Medal, 1956 Melbourne – Silver Medal, 1960 Rome – 5 th Place 1964 Tokyo – 4 th Place	1961, 1965, 1969

The Deaflympics: History, Present Status, Issues, and Comparison with the Paralympics

Name	Country	Event	Olympics Entry Year, Achievements	Deaflympics Entry Year
Ildiko REJTO-UJLAKY	Hungary	Fencing Foil	1960 Rome – Group Silver Medal, 1964 Tokyo – Individual Gold Medal, Group Gold Medal, 1968 Mexico – Individual Bronze Medal, Group Silver Medal, 1972 Munich – Group Silver Medal, 1976 Montreal – Group Bronze Medal	
Susan PEDERSEN	USA	Swimming	1968 Mexico – 4×100 m Freestyle Relay Gold Medal, 4×100 m Medley Relay Gold Medal, 100 m Freestyle Silver Medal, 200 m Individual Medley Silver Medal	
Gerhard SPERLING	East Germany	20 km Race Walking	1964 Tokyo, 1968 Mexico – 5 th Place, 1972 Munich – 4 th Place	1961, 1969, 1977
Vyacheslav SKOMOROKHOV	Soviet Union	400 m Hurdles	1968 Mexico – 5 th Place	1965, 1969, 1973, 1977
George MASIN	USA	Fencing	1972 Munich, 1976 Montreal	
Jeffrey FLOAT	USA	Swimming	1984 Los Angeles – 4×200 m Freestyle Relay Gold Medal, 200 m Freestyle 4 th Place	1977
Piero ITALIANI	Italy	Springboard Diving	1984 Los Angeles – 6 th Place, 1988 Seoul	1993
David WHARTON	USA	Swimming	1988 Seoul – 400 m Individual Medley Relay Silver Medal 1992 Barcelona – 400 m Individual Medley Relay 4 th Place	
Dean Bryan SMITH	Australia	Decathlon	1992 Barcelona	1985, 1989, 1993, 2005

Name	Country	Event	Olympics Entry Year, Achievements	Deaflympics Entry Year
Jueri JAANSON	Estonia	Rowing Single, Double Scull	1988 Seoul, 1992 Barcelona - 5 th Place, 1996 Atlanta, 2000 Sydney - 6 th Place 2004 Athene - Silver Medal, 2008 Beijing - Silver Medal	
Terence PARKIN	South Africa	Swimming	2000 Sydney - 200 m Breaststroke Silver Medal, 400 m Individual Medley 5 th Place	1997, 2001, 2005, 2009, 2013
Frank BARTOLILLO	Australia	Fencing	2004 Athens	
Hugo PASSOS	Portugal	Wrestling Greco - Roman	2004 Athens	1997, 2001, 2005, 2009, 2013, 2017
Tamika CATCHINGS	USA	Women's Basketball	2004 Athens - Gold Medal, 2008 Beijing - Gold Medal, 2012 London - Gold Medal, 2016 Rio - Gold Medal	
Norbert KALUCZA	Hungary	Boxing Flyweight	2008 Beijing	
Maria Belen DUTTO	Argentina	BMX (Bicycle Motocross) Cycling	2008 Beijing	
Chris COLWILL	USA	Springboard Diving	2008 Beijing - 4 th Place, 2012 London	
Fausto QUINDE	Ecuador	50 km Race Walking	2008 Beijing	
David Michael SMITH	USA	Men's Volleyball	2012 London	

Source: Prepared by Shohei Kobayashi, Research Fellow of Paralympic Research Team, the Nippon Foundation Paralympic Support Center based on "Information Panel on the Deaflympics" by Tsukuba University of Technology http://deafstudies.jp/info/files/deaflympics_deaf_athletes.pdf (September 25, 2017)
ICSD <http://www.deaflympics.com/athletes.asp> (January 15, 2018)

These circumstances and background prevented members of the CISS and the ICC, IPC from reaching common ground in their differing opinions. In 1990, it was determined by both parties that the Deaflympics and Paralympics would be held as

two distinct tournaments, and that the autonomy of sports organizations for deaf athletes from each country would be upheld.¹²⁾ There are several circumstances and factors that led to the parties being unable to reach an agreement. For instance there was a strong argument insisting that new members of the ICC, including personnel from the Deaflympics and the International Sports Federation for Persons with Intellectual Disability, should not hold voting rights for matters concerning the Paralympics.¹³⁾ Additionally, CISS members could not be appointed to the position of President of the ICC.¹⁴⁾ At last, seen from the CISS side, being a member of the ICC would lead to increased financial burden – such as travel expenses to participate in conferences and the cost of hiring sign language interpreters – while gaining no merits. The cooperative relationship between the Deaflympics and the Paralympics cooled off, and in 1995, six years after the IPC was officially established, the Deaflympics organization officially withdrew from IPC membership.

4. “Conceptual” Issues of the Deaflympics

Among the issues and challenges faced by the Deaflympics that are theoretical or conceptual problems, is the relationship between determining levels of hearing disabilities, and entry qualifications and standards in competitive sports.

To begin with, some say that the Deaflympics, as an elite level sports tournament – or more specifically, a comprehensive international sports tournament – should make its conditions for entry even stricter to ensure fairness by setting the condition higher than or equal to 55dB, for example to 70dB. On the other hand, if that were to happen, the number of people who are able to enter the tournaments would likely decrease, going against the principle of the Deaflympics to allow as many deaf athletes as possible to participate. This is an issue that still remains.¹⁵⁾

A related issue is that in some countries, regional tournaments loosen entry conditions so that athletes with lesser degrees of hearing impairments can also participate, while national-level tournaments revolve around athletes with more severe impairments. Reasons behind these practices include the fact that sports organizations wish to have as many members as possible, and that rigorous classification of disability levels are costly.¹⁶⁾

Next, there is the issue of wearing hearing aids. The use of hearing aids is prohibited in the Deaflympics. This does not stem from the risk of the equipment breaking during physical activities. Rather, it is based on the principle that wearing hearing aids gives the athlete an “advantage” over others, which would not be fair in a competition.

However At the core lies an even deeper belief. In essence, hearing aids are tools that allow deaf people to take a step closer to becoming a non-disabled person. However, there are people who cannot fully recover their hearing functions even with a hearing aid. As long as such people exist, hearing aids are “symbolic of deaf people adapting to the world of people who can hear”¹⁷⁾ and can be seen to be damaging to the core identity of deaf people. In short, “Since hearing-aid usage affects individuals differently and unpredictably, its exclusion from the playing field is, in part a symbolic gesture of deafness and fairness.”¹⁸⁾

Incidentally, according to the results of a questionnaire conducted among deaf athletes, 25.8% said they used hearing aids during practice, and 24.5% said they would like to use hearing aids during the Deaflympics. In the same questionnaire, athletes who said they do not want to use hearing aids (51.7%) were asked why; roughly the same number of people stated the reason as either to ensure fairness in the tournament, or to avoid the risk of the equipment breaking.¹⁹⁾

Lastly, because the Deaflympics uses sign language as its sole method of communication, it helps in spreading the use of sign language in society.²⁰⁾ The use of sign language in the Deaflympics is also significant when considering that from a historic viewpoint, there were time periods and countries that forbade or did not encourage the use of sign language.

Furthermore, it can be said that behaviors, signs and gestures – all of which transcend sign language – are effective in making people recognize the role they play in human communication alongside language. It can also be said that this will lead to people reevaluating the role that sound plays in human communication. The “meaning” behind voices is often determined not only physically, but also socially. For example, depending on the context, a cough (the so-called dry cough) may not be expressing a physical condition, but may convey a sense of suspicion or caution. In this sense, each sound is filled with “social meaning.”²¹⁾

5. Communication Issues Unique to the Deaflympics

As stated above, the reason the Deaflympics did not choose to integrate itself with or join the Paralympics, instead choosing to remain loyal to its unique principles, was partly due to the difference in rules for conducting the tournaments.²²⁾ There were also historical factors, namely that the Deaflympics had a long history it was proud of, and that it had developed itself independently. In addition to these historical circumstances, the issue of communication in tournaments for the deaf was unique to the Deaflympics, and not something the Paralympics could easily accept.

Communication issues unique to the Deaflympics mostly resolve around the use of sign language. It is not simply about needing sign language interpreters. At times, further considerations are required. For example, if a non-disabled staff member needs to contact a deaf athlete and makes a telephone call, the interpreter would have difficulty “interpreting” the message when one hand is being used to hold the phone, and sign language interpreters would need to be given hands-free mobile phones.

When athletes or personnel leave the stadium, their means of simple communication with non-disabled residents of the local town are gestures and body language. The meaning of gestures, however, can sometimes differ depending on the country, and it is impossible to overlook the fact that athletes and personnel may need to “learn” such customs in advance. For example, in Bulgaria, shaking the head from side to side indicates agreement. During the 22nd Deaflympics in Sofia, Bulgaria, there were Japanese staff members who felt confused by the country’s customs.²³⁾

Another issue is that managers and coaches are mostly non-deaf people (in Japan’s case) while athletes are deaf, making it necessary to include sign language interpreters to ensure smooth mutual communication. However, in order for interpreters to fully master the terms unique to each sports category, they must practice in advance. In addition, the subject of interpretation may sometimes include aspects of the athlete’s daily life, and interpreters must oftentimes perform work beyond interpreting, such as “taking care” of the athletes.²⁴⁾ As a result, the need to clearly define the work of an interpreter has been raised as an issue.

There are also other issues for tournaments, such as when and how to announce the judge’s decisions (which are voiced out loud) in sign language to the athletes.²⁵⁾

and the pros and cons of the opening ceremony being delivered by people without disabilities.²⁶⁾

These “issues of communication” specific to the Deaflympics speak of its uniqueness and the seriousness of communication issues faced by people with hearing impairments. Another unique element of the Deaflympics is illustrated by the following. Among Deaflympics personnel, it is not uncommon to see international exchanges being hindered by language problems, such as insufficient English proficiency between non-disabled speakers. In contrast, for people with hearing disabilities, although sign languages may differ by country, after two or three days, they are often able to communicate quite well among one another.²⁷⁾

6. Similarities and Differences in Practical Issues between the Deaflympics and the Paralympics

Analyzing the reports of athletes, coaches and staff members who participated in the Deaflympics shows several challenges and issues that come with taking part. Many of the problems can also be seen in the Paralympics, but their conditions, breadth and degree differ. Such issues and challenges are summarized below, based on reports by Japanese teams from the past four games (the 21st and 22nd Summer Deaflympics and the 16th and 18th Winter Deaflympics – the 17th was canceled).

(1) Degree of recognition²⁸⁾

A distinctive feature of the Deaflympics is that there are occasional cases where participating athletes or staff members had no idea the Deaflympics even existed until a few years earlier.

For example, Mr. Masataka Nishi who participated in the 21st Deaflympics in basketball did not know of the Deaflympics until a year earlier, Ms. Mio Inoue until four years earlier, and staff members who took part in the 16th Winter Deaflympics as helpers and instructors for ski waxing until right before the tournament.²⁹⁾

Many people point out that the Deaflympics’ recognition level needs to be raised in order to resolve financial issues,³⁰⁾ but recognition is also closely related to the athletes’ and participants’ fundamental motivation. In other words, the problem lies in the fact that even if someone wins a medal, the achievement lacks social recognition and praise, a problem that precedes the issues of prize money or reception.³¹⁾

Additionally, there are arguments that point out that in order to raise the level of recognition, articles related to the Deaflympics have to include more elements that tell a story. In order to do so, the on-site coaches, athletes and staff members need to cooperate to improve the publicity of the Deaflympics with a focus on the following:³²⁾

1. Perspective (How to assess the game. How to deliver it.)
2. Highlights of the game (Backgrounds of the winner and loser.)
3. Episodes (How much effort was put in by the athlete.)
4. Technique commentary (If it is an article in the sports page, how the winner was able to win.)
5. Profile (Career and where the athlete has played before.)
6. Records (Sports are based on records, so it is crucial to add data)

Additionally, some people have pointed out the involvement of the Imperial Family in relation to recognition. This was in 2005, after Prince and Princess Akishino of Japan met with people involved in the Deaflympics in December 2004, which was seen as contributing greatly to increasing the Deaflympics' social level of recognition.³³⁾

It is also beneficial to analyze the frequency and nature of news on the Deaflympics to study its level of recognition.

Table 2 compares the number of articles in Japan's nationwide newspapers (Asahi, Mainichi, and Yomiuri) covering: 1) the Deaflympics held in Samsun, Turkey between July 18 and 30, 2017; 2) the previous Deaflympics (held in Sofia, Bulgaria in

Table 2: Number of articles from each newspaper company on the Deaflympics and Para Athletics Championships

	Deaflympics 2013	Deaflympics 2017	World Para Athletics Championships London 2017
Asahi	1	25	10
Mainichi	0	12	24
Yomiuri	0	24	7

Source: Research and Table by Shohei Kobayashi, the Paralympics Research Team

summer of 2013); and 3) the World Para Athletics Championships, held in London at around the same time as the Samsun Games (July 14 – 23, 2017).

This research on newspaper articles included three days before and after each tournament, and gathered articles from nationwide morning and evening newspapers that met a search under the keyword “Deaflympics” and “World Para Athletics Championships”.

As Table 2 shows, the number of articles increased dramatically for the 2017 Deaflympics. The number of articles on the 2017 Deaflympics is also as high as or even higher than for the World Para Athletics Championships.

Additionally, the following Tables 3 and 4 show details of the articles, in particular in which section they were published (the sports page, society page, etc.).³⁴⁾ The prominence of the articles differed depending on the newspaper. It is also worth noting that while most articles on the Para Athletics Championships were on the sports page in each newspaper, an increasing number of those covering the Deaflympics were on pages other than sports, such as society.³⁵⁾

Table 3: Newspaper reports on the 2017 Samsun, Turkey Games (by topic page)

	Sports	General		Commentary	Society	Other	Total No. of articles
		Front Page	Others				
Asahi	0	1	2	0	21	1	25
Mainichi	9	0	1	1	1	0	12
Yomiuri	16	0	6	2	0	0	24

Source: Research and Table by Kobayashi, the Paralympics Research Team

Table 4: Newspaper reports on the World Para Athletics Championships London 2017 (by topic page)

	Sports	General		Commentary	Society	Other	Total No. of articles
		Front Page	Others				
Asahi	10	0	0	0	0	0	10
Mainichi	24	0	0	0	0	0	24
Yomiuri	4	0	3	0	0	0	7

Source: Research and Table by Kobayashi, the Paralympics Research Team

(2) Relationship with non-disabled people

As with the Paralympics, there are voices among Deaflympics personnel calling for enhancements to activities undertaken by both deaf athletes or potential athletes, and people who can hear. For example in bowling, proposals are being made to “increase interactions” with non-deaf people and to work with non-deaf coaches.³⁶⁾ Additionally, for alpine skiing and snowboarding, there is the opinion that deaf athletes should also actively participate in training sessions and tournaments for people who can hear.³⁷⁾

However, it should be noted that there are those who point out the difficulties in communication between athletes or between deaf athletes and non-deaf coaches.³⁸⁾

Additionally, there are many non-deaf people among the judges and tournament personnel at the Deaflympics. It has been pointed out that Japan has a particular problem when communicating with them: that they need to be accompanied not only by a sign language interpreter, but also an interpreter for languages, such as English or the local language.³⁹⁾

(3) Deaflympics and society

Similar to the Paralympics, by raising its level of recognition, it is expected that the Deaflympics will have an opportunity to strengthen its social significance and deepen society’s awareness and consideration toward deaf people. There are several points of comparison with the Paralympics that should be noted. One is that it is an opportunity for non-deaf people to reflect on the way they express emotions and excitement. This is suggested by the words of Ms. Nami Segawa, who participated as a staff member during the 16th Winter Deaflympics:⁴⁰⁾ “Instead of clapping, deaf people wave their hands above their heads to indicate applause, similar to when we sing *“Twinkle, Twinkle, Little Star”*. Whenever a player scores a goal, the fans all start to wave their hands at once. The moment when medals were decided, I was truly stuck by the scene that unfolded – coaches and staff members transcended the barrier of communication that stood between them and the athletes to share their joy. When the gold medalists Mr. Harada and Ms. Kasai received their awards, the Japanese national anthem “Kimigayo” was played and when the sign language interpreters began to sign the chorus, deaf athletes from other countries imitated the words and sang along. Another characteristic of the Deaflympics is that the audience stamps on the ground to convey their applause to the medalists standing on the

podium.”

Furthermore, barrier-free issues in the Deaflympics need to be looked at from a different perspective from the Paralympics. In a physically barrier-free environment, there are additional measures that need to be taken. For example, elevators need to be equipped to respond in case a deaf person becomes trapped inside (contact with emergency services, generally done through an intercom, would be difficult). Additionally, even at the Deaflympics, starting orders and results are most often announced by voice, and there were cases when visual displays proved insufficient.⁴¹⁾ Other cases have also been pointed out, such as the opening and closing ceremonies being conducted mainly by voice,⁴²⁾ and cases when there were not enough large-scale monitors in the stadium to act as supplementary visual information tools.⁴³⁾ These are viewpoints to take into consideration when trying to create detailed barrier-free measures.

Moreover, from a social standpoint, the fundamental deficiency of sign language interpreters can also be seen as a barrier. There is a heavy reliance on part time work, for example by housewives, and training professional interpreters has lagged behind.⁴⁴⁾

The development and spread of mobile phones that can be operated single-handedly by people who use sign language, would also be a barrier-free effort. A system for interpreters to utilize mobile phones with earphones when relaying voiced information to deaf athletes - to prevent them from assuming an uncomfortable posture to be able to use sign language while holding a phone - would be another aspect to consider.⁴⁵⁾

In addition, there is a need for further research on the significance of sound in sports. For example, Mr. Hideki Arai, who was a cross country coach, points out the importance of mental imaging derived from “sound” in cross country sports.⁴⁶⁾ His description suggests that further research is necessary on how athletes with hearing impairments can grasp and understand what is usually understood through sound. “In sports where techniques are crucial, such as cross country skiing, “*mental images*” are said to be very important. Mental imaging transmits information from the brain to the muscles, and without it, the muscles will not receive the information. In order to picture those mental images all the more clearly, information from the ears is very important, in addition to information from the eyes. The more skilled athletes are, the

quieter they can ski. We often teach children, “*Try to slide the skis quietly and not stomp them on the snow*”, to make this easier to understand. As we trained with deaf athletes, the other staff members and I began to realize that information from the ears may be just as important as information from the eyes for creating mental images.”

(4) Common issues faced by both the Deaflympics and the Paralympics as sports tournaments

There are a number of practical issues on various levels that the Deaflympics in Japan and the Paralympics face in common, such as training and strengthening athletes, the abilities and capabilities of the executives, the organization of sports organizations, and a lack of international perspective, last of which is somewhat unique to Japan. By examining recent team reports, these points can be broken down as follows: A) Too much burden is being placed on individual athletes with not enough support from sports organizations or related bodies⁴⁷⁾; B) The need to improve athletes’ and staff members’ self-management (for example, health management and injury prevention)⁴⁸⁾; C) The need to strengthen mental training (especially compared to athletes from other countries)⁴⁹⁾; D) The need to improve physical fitness (and not only skill in each sport)⁵⁰⁾; E) The importance of nurturing “professional” awareness, including the expansion of corporate support.⁵¹⁾

Additionally, reports from the 20th Deaflympics pointed out a lack of information on athletes from other countries and their skills,⁵²⁾ an issue that is also being raised (for certain sports) by Paralympics personnel.

7. Philosophy and Identity of the Deaflympics

The principle of the Deaflympics, both historically and in its current philosophy, is to deepen deaf identity and promote international exchange between deaf people. With that being the case, it is necessary to carefully consider how involved non-deaf people should become or how far joint projects should go in the management, practice, and training camps that are currently mostly comprised of deaf people. Consideration should not only revolve around the identity of the Deaflympics, but should also be from realistic and practical perspectives (for example, the pros and

cons of having deaf and non-deaf people sharing rooms during training camps or at competitions).⁵³⁾

In connection to the Deaflympics' identity, there is the issue of the identities of individual deaf people. It has been pointed out by some that the Deaflympics has helped strengthen the identities of deaf athletes and participants through the promotion of international exchange.⁵⁴⁾

Related to the issue of individual identities, is the contents of the directory of Deaflympics participants. Only the athlete's current home area is listed. Some feel that other personal information (such as place of employment or school) should be made public for supporters,⁵⁵⁾ which needs further discussion. The underlying issue here is to what extent, when, and how to make public the fact that someone is deaf in an appropriate manner, and is connected to the issue of identity.

The Deaflympics has also been helpful in bringing deaf communities together and strengthening their identities in certain countries. An example is during the 18th Deaflympics, held in Russia, which helped to revitalize Russia's deaf community.⁵⁶⁾

Additionally, regarding the relationship between the social identities of deaf people from each country and international interactions, one issue is to what extent the use of sign languages unique to each country should be accepted and respected during international tournaments.

It should also be noted that the Deaflympics is effective in nurturing a sense of unity not only among deaf people, but also between deaf and non-deaf people. During the opening ceremony in Rome, many of the spectators were described as having friendly conversations with one another instead of watching the ceremony.⁵⁷⁾ From this point of view, bringing the image of the Deaflympics as close as possible to that of the Olympics can become a symbol of the promotion of social inclusion with deaf people.⁵⁸⁾

Notes

- 1) Ammons, Donald K., 2008, "Deaf Sports & Deaflympics," <http://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/presrep-j.pdf> (October 22, 2017).
- 2) Cabanel, P. and Encrevé, A., 2015, "Dictionnaire biographique des protestants français de 1787 à nos jours," Les Editions de PARIS, Tome 1, 34.
- 3) *Ibid.* 34.
- 4) Le Comité International des Sports Silencieux (English: The International Committee of Silent Sports - ICSS) later changed its name to Le Comité International des Sports des

Sourds (English: The International Committee of Sports for the Deaf - ICSD). The constitution for ICSD states that both CISS, using the French name, and ICSD, using the English name for the Committee will be used. International Committee of Sports for the Deaf, Deaflympics Constitution, <https://www.deaflympics.com/icsd.asp?constitution> (October 21, 2017). In this paper, unless stated otherwise, the acronym "CISS" will be used to indicate the International Committee of Sports for the Deaf.

- 5) Cabanel and Encrevé, *op. cit.* 35.
- 6) Gertz, G. and Boudreault, P., 2016, "The SAGE Deaf Studies Encyclopedia," SAGE Publications, Inc, 3, 926.
- 7) *Ibid.* 927.
- 8) Oikawa, Chikara, 1988, "A Study of the Factors in the Process that CISS left the IPC," Japanese Journal of Sport Education Studies, 18, 50.
- 9) Bailey, Steve, 2008, "Athlete First," John Wiley & Sons, 94-95.
- 10) *Ibid.* 71.
- 11) Oikawa, *op. cit.* 52.
- 12) *Ibid.* 51.
- 13) Bailey, *op. cit.* 75-76.
- 14) *Ibid.* 82.
- 15) Stewart, David A., 1991, "Deaf Sport," Gallaudet University, 23.
- 16) *Ibid.* 22.
- 17) Sunada, Takeshi, 1996, "The Deaf and Sports (Rôsha to Supôtsu)," Gendai Shiso Extra Edition, Seidosha, 24(5) 153.
- 18) Stewart, *op. cit.* 25.
- 19) Nakamura, Yuki, 2009, "Questionnaire Survey Report on the Sports Environment and Awareness of Deaflympics Athlete Candidates (Defurinpikku Sensyu Kôho no Kyôgi Kankyo to Ishiki ni kansuru Ankêto)," <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/tsukuba-report.pdf> (October 26, 2017).
- 20) There are also debates concerning International Sign. In English, whether gestures amount to a "language" or not is clearly classified by the terms "sign" and "sign language." International Sign is a common sign language used mostly in Europe, and the Japanese Federation of the Deaf translates it as "International Sign." However, the World Federation of the Deaf (WFD) has held several conferences on whether it is appropriate for International Sign to be called International Sign Language. So far, it has not been granted the term "language." It has also been argued that although International Sign is used as the only common language at the Deaflympics, it represents "signs" that transcend the cultures and languages of different countries, not an official language. This paper refrains from delving deeply into the discussion of "sign language and language," but International Sign used at the Deaflympics can at the very least be taken as "one method of communication."
- 21) Padden, C. and Humphries, T., 1988, "Deaf in America," Harvard University Press, 92-93, 99.
- 22) At the Deaflympics, audible signals that communicate the start of a race/game or the referees' judgments are replaced with visual signals that are communicated via lights to the athletes. Otherwise, tournaments are held with the same rules as the Olympics.
- 23) Japanese Federation of the Deaf, 2014, "22nd Summer Deaflympics Games: Participation Report from Japan's Athletic Teams," <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/report2013.pdf> (October 22, 2017), 25, 106. Hereinafter referred to as "22nd Games Report."

- 24) Japan Sports Association for Disabled and Japanese Federation of the Deaf, 2010, "21st Summer Deaflympics Games: Participation Report from Japan's Athletic Teams," <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/report2009.pdf> (October 22, 2017), 83. Hereinafter referred to as "21st Games Report."
- 25) 22nd Games Report, 127.
- 26) *Ibid.* 32.
- 27) 21st Games Report, 113.
- 28) To see details of international comparisons over the years regarding the level of recognition of the word "Deaflympics" in Japan and other countries, refer to research by the same research member Shohei Kobayashi mentioned on page 44 of this paper.
- 29) 21st Games Report, 64, 68; the Japan Sports Association for Disabled and Deaflympics Dispatch Committee of the Japanese Federation of the Deaf, 2007, "16th Winter Deaflympics SALT LAKE 2007," <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/report2007.pdf> (October 23, 2017), 15 (The pages of this report are not numbered, so the author numbered them for convenience's sake). Hereinafter referred to as "16th Games Report."
- 30) 22nd Games Report, 82, 128; the Japanese Federation of the Deaf, 2015, "18th Winter Deaflympics Games: Participation Report from Japan's Athletic Teams," <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/report2015.pdf> (October 22, 2017), 28. Hereinafter referred to as "18th Games Report."
- 31) 18th Games Report, 28.
- 32) *Ibid.* 20.
- 33) Japanese Federation of the Deaf, 2005, "2005 Deaflympics Games Melbourne," <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/report2005.pdf> (October 28, 2017), 58. Hereinafter referred to as "20th Games Report."
- 34) Report by Shohei Kobayashi, a Research Fellow of the Paralympic Research Team at the Nippon Foundation Paralympic Support Center, who observed the 23rd Summer Deaflympics Games (Samsun Deaflympics 2017). Includes the table illustrating the number of articles per newspaper.
- 35) What needs to be pointed out here is the pages that the articles for the 2017 Deaflympics were published in. Specifically, many articles concerning the Deaflympics were published not on the sports page, but rather the society page. It should be noted that this does not mean the Deaflympics is not seen as a "sport." Rather, it heavily depends on who did the reporting in Samsun, Turkey, and which department the reporter belonged to.
- 36) 21st Games Report, 86.
- 37) 18th Games Report, 31, 40.
- 38) 21st Games Report, 66.
- 39) *Ibid.* 82.
- 40) 16th Games Report, 7.
- 41) *Ibid.* 36.
- 42) *Ibid.* 32.
- 43) 22nd Games Report, 32.
- 44) *Ibid.* 127.
- 45) 21st Games Report, 35; 22nd Games Report, 33.
- 46) 16th Games Report, 26.
- 47) 22nd Games Report, 125.

The Deaflympics: History, Present Status, Issues, and Comparison with the Paralympics

- 48) 16th Games Report, 24; 18th Games Report, 31; 21st Games Report, 52, 75; 22nd Games Report, 48, 51, 64, 71, 103, 115.
- 49) 16th Games Report, 18, 32; 18th Games Report 42, 43; 21st Games Report, 32, 52, 53, 64, 66, 140, 141; 22nd Games Report, 26, 50, 65, 67, 80, 119, 130.
- 50) 21st Games Report, 73, 134; 22nd Games Report, 58.
- 51) 22nd Games Report, 83, 105.
- 52) 20th Games Report, 63.
- 53) 18th Games Report, 13.
- 54) 21st Games Report, 95.
- 55) 22nd Games Report, 45.
- 56) 18th Games Report, 22.
- 57) Breik, J.K., Hauland, H., and Solvang P., 2002, "Rome - a Temporary Deaf City," Stein Rokken Center for Social Studies, 30.
- 58) *Ibid.* 29 makes somewhat similar observations.